

2012年3月4日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：第一サムエル記 28章 1～14節

説教題：主は知っておられる

1 危機に直面するダビデとサウル

今日の箇所では、ダビデとサウルのふたりが登場します。ダビデはペリシテ人の地に逃れてきています。そのペリシテ人が今やイスラエルと戦争を始めようとしています。いっぽうのサウルは、イスラエルの王としてペリシテ人との戦いに直面します。

ダビデとサウル、このふたりが敵と味方に分かれて戦わなければならなくなりました。ふたりがかかえている問題はまったく違います。でも、生きるか死ぬかの分け目となるほどの重大な問題に直面していることには変わりがありません。そんな試練の中に立たされたふたりが、それぞれどのように応答していったのかを見て参ります。

2 ダビデ

(1) ペリシテ人の地で生き延びる

ダビデはイスラエルにとどまる限り、いつかサウルに殺されるだろうと考え、敵であったペリシテ人の地に逃れていきました。ペリシテ人のリーダーであるアキシュは、最初はダビデを警戒しましたが、いざとなればダビデを利用しようという魂胆を持ってかくまうことにしました。

これで、ダビデはなんとかピンチから脱出できました。でも安心してはいられません。敵の地で生き延びて行くためには、アキシュに忠誠を誓うしかありません。アキシュの忠実な部下であるように振る舞うために、ダビデは結局嘘をつかなければならなくなります。

その嘘がばれたら殺される。そんな緊張の毎日が続きました。

(2) 「あなたご存じです」

そんなダビデのところに悪い知らせが入ります。ペリシテ人がイスラエルと戦うために軍隊を招集したというのです。こうなると、ダビデの立場は非常に微妙です。すぐさまアキシュはダビデを呼び出し、念を押します。「あなたと、あなたの部下は、私といっしょに出陣することになっているのを、よく承知してもらいたい。」

ひとことで言えば、ダビデが先頭に立ってイスラエル人を殺せということです。もしそうしなければ、ダビデとその家族、そして仲間達を全員殺すぞという脅かしです。ダビデをアキシュの護衛につけると言っていますが、簡単には喜べない。ダビデが変なことをしないように常に見張っているというプレッシャーをかけているのです。

ダビデは悩みました。イスラエルは自分の同胞です。同胞を殺す事などできません。でも、ここでもしアキシュに忠誠を示すことに失敗すれば、今度は自分と自分の仲間達が殺されます。まるでダビデは、切り立った崖の上で綱渡りをせよと言われたようなものです。右を見ても左を見ても、深い谷底が口を開けてダビデを飲み込もうとしています。そんなぎりぎりの中に立たされたとき、ダビデはこう語ります。

「よろしゅうございます。このしもべが、ど

うするか、おわかりになるでしょう。」

別の言い方で訳せばこうなります。「あなたは、あなたのしもべがこれからすべきことをすべて知っておられます。」

「あなた」は、アキシュを指します。でも、どうもそれだけではなさそうです。ダビデはまるで主ご自身がダビデの前におられるように語ったいるのです。ダビデは祈っているのです。自分は右にも左に行くこともできない。けれども、これから先に必ず主が備えてくださる第三の道歩んでいく。ダビデが歩むべき道を主は知っておられるのだと告白します。

第三の道とはなんでしょう。自分たちが無事に安全に救われるということでしょうか。いいえ。ダビデは死ぬことを覚悟しています。ダビデが見ていたのは、死の先にある救いです。

そんなダビデの祈りに、主はどのように答えてくださったか。そのことは来週見ていきます。確かに主はこのあと不思議な形で答えてくださいます。しかしこの時点ではまだ主の助けは何もありません。いまは何も起きないけれども、ただ主が答えてくださる時を待ち望んでいきます。

ダビデはこのように歩もうとしていきます。

3 サウル

(1) 主に伺っても答えがない

ではサウルなどうだったのでしょうか。

彼は敵であるペリシテ人の陣地を見て、腰を抜かしてしまいます。わが軍隊の装備と言えば相変わらず竹と木でできた槍くらい。いっぽうのペリシテ人は鉄と青銅で造られた近代的兵器で武装しています。力の差はだ

れが見ても明らか。戦わずして勝敗は決まったも同然。

サウルは最初、主に伺おうと努力したようです。ところが何の答えもない。6節に「ウリム」という聞き慣れない名前が出て来ております。詳しいことはわかっていないのですが、色の違う二つの石によって神の御旨をたずねる人たちのことではないかと言われています。とにかくあらゆる手を尽くしましたが、主からの応答は何もありませんでした。

(2) 自分の手で追い出していた霊媒に伺う

このままでは自分は死んでしまう。そんな恐れにとりつかれ、サウルはあせります。そして、霊媒という手段に手を出していきます。

この霊媒については、3節にこんな説明があります。「サムエルが死んだとき、前イスラエルは彼のためにいたみ悲しみ、彼をその町ラマに葬った。サウルは国内から霊媒や口寄せを追い出していた。」なぜ追い出したかと言えば、申命記にこうあるからです。「呪文を唱える者。霊媒をする者。口寄せ、死人に伺いを立てる者があつてはならない。これらのことを行う者はみな、主が忌みきらわれるからである。」(申命記18章11、12節前半)

サウルは、この申命記のみことばに従い、霊媒師たちをイスラエルから追い出していました。ところが、いざ困ったことが起こるとなりふりかまわず霊媒師のところに向かい、なかば強制的に女霊媒に対し、死んですでに死んでいたサムエルを呼び出すようにと要求していきます。

霊媒師が死んだ者を呼び寄せる。不思議に思うかもしれません。実は、このような人たちは今の時代の日本にも実在します。私が生まれ育った村では、「拝み屋さん」という名

前で呼ばれる人がいました。村の人たちは、誰かが重い病気にかかったり、困った問題にぶつかったりすると「拝み屋さん」のところに行き、拜んでもらっていました。今思い返すと、死んだ者が拝み屋さんをとおして現れるというような話さがさやかれていたように記憶しています。

これとはまた別のことですが、今ちょうど、ある有名なタレントが女占い師にマインドコントロールされているのではないかとちょっとした騒ぎになっています。また、テレビや週刊誌には、スピリチュアルカウンセラーという肩書きの方々が登場し、大きな人気があるのだそうです。多くの人たちは心のよりどころとしています。

それなのにどうして神は、霊媒とか占い師というような人たちを忌みきらうのでしょうか。サウルは霊媒に助けを求めました。しかしどうなったか。詳しくは来週見ますが、霊媒のところに行っても、結局何の救いも見つけられなかった。逆に絶望して倒れてしまいます。

どんなに魅力的に見えても、結局、霊媒や占い師は私たちを救うことのできない。だから神は忌みきらうのです。私たちのことを心配してくださるがゆえにこうされます。

4 信仰の土台が試されるとき

週報の表紙に、2011 年度の表題聖句としてマタイの福音書7章24節のみことばを掲げてまいりました。「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることが出来ます。」何も無いときには、砂の上に家を建てようが、それとも岩の上に建てようが、そこに大きな違いがあるとはわかりま

せん。

しかし、イエスをご存じです。いつまでも穏やかな日が続くのではない。やがて嵐がやってきて、大水があふれ家に押し迫ってくる時が来る。それほどの試練の時がやって来る。その時初めて、その人が立っていた信仰の姿が明らかになる。

ダビデはペリシテ人の地に逃げこんだ、言わば反逆者です。お尋ね者。惨めな敗北者のようです。家にたとえれば、みすぼらしい掘っ立て小屋にしか見えなかった。しかし土台はどこにあったのか。岩の上にあります。彼は大水が襲ってくる中、死を覚悟しながらもなお、キリストという土台に踏みとどまろうとしました。

一方のサウルはどうか。彼はイスラエルの王です。イスラエル軍の司令官でもあります。富と財産と権力を手にしています。この世のすべてのものを手にし、りっぱな家が建てられているように見えた。しかし肝心の土台がなかった。大水が襲ってきたとき、家は倒れ、そして流され、やがて悲惨な結末を迎えていくことになります。

私たちはもちろん岩の上に立ちたいと願っています。信仰に立ちながら神に祈ります。でも何度祈っても答えが聞かれないように見えるときがあります。状況が変わらない。いやますます悪くなっていく。神は何も動いてくださらない。神の救いが実感できないときがあります。

しかし、神はあなたのことを何も知らないということではない。むしろ正反対で、すでにご存じである。そして、私たちが気がつかないところですでに道を備えてくださっています。どこに救いの道があるのか、それが見えてくるまでしばらく時間がかかるかも

しれません。

もう待てませんと言うのでしょうか。大水が目の前に押し寄せて来るのを見て、「もうだめだ。手遅れだ。神は私を助けてくれなかった。」と叫ぶのでしょうか。慌てることはありません。私たちが立っている土台はびくともしない。そこに踏みとどまりなさい。私たちの立っているところが一番安全なのです。

なぜそう言えるのですか。神であるイエス・キリストが、私たちよりも低くなられ、腰をかかめ、十字架につけられ、血を流され、死んでくださった。そのようにして与えられた土台です。死からよみがえられた方の上に私たちは立たせていただいている。自分が立っているところがどれほど恵みに満ちたところか、もっと足もとを見てください。恵みは上にあるのではない。どこか別の場所にあるのではない。私たちの足もとにある。そのことを思い起こしたいと願います。